

## 菊の木花佐久耶姫と

### 牡丹と葵の篤姫

十五回生 伊藤 發子

(山崎) 在福岡

木花佐久耶姫(コノハナサクヤヒメ、サクは原典では開、あるいは咲の字があてられることもある)という美しい名前前の姫君は瓊瓊藝命(ニギノミコト)の嫡妻で、富士山の女神でもある。姫は天照大神(アマテラスオウミカミ)の孫である瓊瓊藝命と笠沙岬(カササノミサキ)で出会う。笠沙岬は薩摩半島の最南端の小さな半島で、隼人族の本拠地の一つである。瓊瓊藝命はここで木花佐久耶姫にプロポーズした。神話の伝説には、現実には考えられない話が多いが、そこに何らかの事実が隠されているので、語り伝えられてきたのであろう。しかし奇妙なことが沢山ある。例えば天照大神は女神とされているが、夫の名前は古事記・日本書紀のどこにも書いていない。天照大神が女神として描かれるようになって

たのは、明治以後だという説もある。

佐藤弘夫著『アマテラスの変貌』(法蔵館、2001年)によれば、長谷寺の十一面観音の右脇侍として雨宝童子立像がある。その頭上の扁額に「天照皇太神」の文字が書いてあるが、その童子は髪をみずらに結び、左手に宝棒、右手に宝珠をもち、明らかに男子であるという。また、奈良の談山神社に室町時代の「三十番神絵」があり、そこに天照大神が烏帽子に狩衣の男子像として描かれているそうである。

しかし男子の衣装だからといって、すぐさま男子と決めつけることはできない。須左之男命(スサノヲノミコト)が根の国に追放されるに当たって、ミコトは姉?の天照大神に挨拶しよう和高天原(タカマガハラ)にのぼってきた。大神は弟を疑って、弟と戦うべく髪をみずらに結び、武装して待ち構えていた。アマテラスは両性具有の神とする説もある。

天照大神には御子があつて、嫡男を正勝吾勝勝速日天忍穗耳命(マサカツアカツカチハヤヒアミノオシホミミノミコト)という。このオシホミミノミコトは高皇産霊命(タカミムスビノミコト)の娘である万幡姫(ヨロヅハタヒ

メ)を娶り、生まれたのがニギノミコトである。天照大神は嫡男オシホミミノミコトを地上に降ろして支配させようとするが、オシホミミノミコトは自分の代わりに生まれたばかりの赤ん坊のニギギを行かせたいと申し出る。これがまた理解に苦しむところだが、当時地上には高天原の反抗勢力がはびこり、さばめいていて、何人かの使者を送ったが、いずれも追い返されてきた。出雲族以外の諸族は服従わなかったのである。

いずれにしてもニギノミコトは天照大神から授かった三種の神器を携え、五人の従者に守られて、

天の石位を離れ、天の八重たな雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋にうきじまり、そり立たして、竺紫(ツクシ)の日向(ヒムカ)の高千穂(タカチホ)のくじふる嶺に天降りまさしめき。

(古事記)

ニギノミコトはそのとき、「此地は韓国(カラクニ)に向ひ、笠沙の御前を真来通(マキト)りて、朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり。此地は甚吉(シキ)地。」と言ってここに

落ち着いた。

「此地」が何処を指すのか、高千穂という説と笠沙岬という説に分かれるが、いずれにしてもニギギはここで土着の神である大山祇神(オウヤマツミノカミ)の娘に出会い、求婚した。うまいやり方である。土地を征服するには、その地の有力者の婿殿に収まるのが一番でつとより早いのである。この場面は古事記では男女一対一の出会いとして描かれているが、日本書紀では「織経る少女」が二人いて、ニギギがその「美しい人」たちは誰なのか、尋ねると、

大山祇神の女等、大を盤長姫(イワナガヒメ)と号う。少を木花佐久耶姫(コノハナサクヤヒメ)と号ふ。亦の名は豊吾田津姫(トヨアタツヒメ)とまうす、云々。皇孫、因りて豊吾田津姫を幸す。即ち一夜にして有身めり。

「吾田」は笠沙岬近傍の「阿多」に相当し、吾田隼人の本拠地であった。姉のイワナガヒメは醜いと言って幸されなかったが、その「詛ひ」によってニギギは永遠の生命

を失つて、やがて死ぬことになる。つまり三ギは神から人になつて死んだ。そして墓が造られた。

さて、アタツヒメコノハナサクヤヒメはその一夜にして三皇子、つまり三つ子の男子を得たのであるが、ここで興味深いのは、この姫がはた織り姫だったことである。後述するようにコノハナサクヤヒメは富士山の浅間(センゲン)神社の祭神となるが、その根拠は「ここにありと推定される(佐藤『アマテラスの変貌』。記・紀にははたを織る女子がしばしば登場する。素戔嗚尊(スサノヲノミコト)が高天原にのぼってきたとき、天照大神ははたを織っていた。

天照大御神、忌服屋に坐して、神御衣織らしめたまひし時、その服屋の頂を穿ち、天の斑馬を逆剥に剥ぎて墮し入るる時に、天の服織女見驚きて、梭に陰土を衝きて死にき。(古事記)

浅間神社という名前の神社は全国各地に多数あるが、総本社は富士山である。古来日本人が一番愛してきた山は富士山だが、この形姿すぐれた山が平安初期

噴火があつて、昼夜雷鳴轟き、灰が雨のように降つた。「四月十八日という日付が、前年の延暦十八年のそれであることは言うまでもない。

(四) 常陸国風土記(八世紀に成立)には概略次のような記述がある。神祖命(ミオヤノミコト)が福慈(フジ)の岳を訪れ、そこに住む神と対面したという古老の話があつて、それによると、その神の名は福慈の神といい、「その神の住める山は、生涯の極み、冬も夏も雪ふり、冷寒重襲り、人民も登らず、飲食も奠る者なけむ。」

福慈の岳は富士山を指すと考えられる。この山には福慈の神が住むにもかかわらず、あまりに苛烈な山なので、人は登らず、神を祭りもしない、というのである。古代にあつては形姿美麗の山は、山全体が神として崇拜の対象であつた。三輪山、香具山、日光男体山など、いずれもそうだった。富士山は形すぐれて、神が住むと思われながらも、慕われるよりは恐れられる山だったのである。

までは荒ぶる山として人々に恐れられていたことは、今日では想像もできない。しかし記・紀、風土記、続日本紀などによると、富士山はしばしば激しい噴火をくりかえし、大地震、雷、大雨、洪水を引き起こし、多数の人畜を殺傷し、降灰は家屋・田畑を損壊して飢饉をもたらした。諸書は「地震る」という表現でその激甚な被害を伝えている。その例をいくつか竹谷鞠負『富士山の祭神論』(岩田書院、2006年)によって紹介すると、

(一) 第七代孝靈天皇の御代、富士山が噴火して、「嶺上奄忽」焼出でて猛炎天を焦し…地雷振動せり。(日本書紀)

(二) 元応元(822)年七月六日付けで、「駿河国言す。富士山下に灰を雨らす。灰の及ぶ所は木葉彫萎す。」(続日本紀)

(三) 日本紀略には延暦十九(800)年三月十四日付けの記述として、駿河国からおうよそ次の報告があつたという。「四月十八日にかけて富士山頂で

火を吐く恐ろしいこの山の神社が、なぜ「浅間神社」と呼ばれるのか。「アサマ」に類縁する地名は日本各地に存在する。浅虫、浅間、熱海、阿蘇などで、いずれも火山または温泉地である。一説によると、「アソ」には「燃える岩」の意味があるという。この関連で見ると、火を吐く富士は「アサマ」と呼んでもおかしくないであろう。

「フジ」は古来どのように表記され、どのように表現されてきたか、見てみよう。

富士山(続日本紀、日本紀略)

福慈(常陸国風土記)

不二(万葉集、源氏物語)

万葉集には次のような表記も見られる。「不尽山」フジサン、「富士能高嶺」フジノタカネ、「不土能高嶺」フジノタカネ、「不尽嶺」フジノネ、「不土」フジ、「不尽」フジ。

富士山は恐れられる一方で、次の例に見るように、高く尊い山として崇拜もされた。

山部宿祢赤人富士山を望みて歌一首

天地あめつちの分かれし時ゆ神さびて高く尊き布土能高嶺を  
天原あまのほちふりさけ見れば渡る日の陰かげもかくろひ  
照月てるつきの光も見えず白雲もい行きはばかり  
時じくぞ雪はふりける語りつぎ言いつぎゆかむ不土能  
高嶺は

反歌

田子の浦ゆうち出て見ればま白にぞ

富士の高嶺に雪は降りける

高橋連虫麻呂たかはしむらじまろ

富士の嶺ねを高み恐かしこみ

天雲あまぐももい行きはばかりたなびくものを

しまったからには自分がその葉をのんで不老不死の命を得たところで何の意味もない、という意味の歌を詠んで、そして勅使に命じて、あまたの武士たちを率いて天に一番近いというあの駿河の山に登らせ、山頂で不死の葉を焼かせる。その山は「ふじの山」と名づけられた。「ふじ」は「不死」に因むのであろう。その煙はいまなお富士山頂から雲のなかへたちのぼっている、というのである。

富士山頂から立ちのぼる煙はやがて、恋の思いを表わすものと見なされるようになる。竹取物語から百年後に編まれた古今和歌集(905)では富士の煙が、「恋の思ひ」、「恋の焦れ」となつて歌われる例を見ることができ。かぐや姫はこうして富士浅間神社のご祭神として江戸時代初期まで鎮座しつづけたのであるが、しかし彼女の地位は常に安泰だつたわけではない。

というのも、かぐや姫は平安中期の一女官である紫式部によつて、論評の対象とされて首位の座から引きずりおろされたからである。源氏物語では竹取物語は「物語のいできはじめの祖」と呼ばれて、絵合えあわせの巻で宇津

富士山噴火の災害が激甚であればあるほど、富士信仰は強まり広がった。八世紀頃から駿河や甲斐その他の国の各地にアサマの神社が造られるようになった。日本文徳実録の仁寿三(853)年七月十三日の記によれば、それまで無位だつた富士山浅間神社が、朝廷から位を授かつて「従三位浅間大神」となつた。朝廷は荒ぶるアサマの神を鎮めるために、関東の各地に浅間神社を建立した。坂東の地が荒廃して、租税の納入が滞つて重大な事態が起ることを恐れたからである。

このように高く尊く、また恐ろしいという富士山のイメージは、平安時代になると変化を始める。それは、日本人なら誰もが知っているあのかぐや姫の竹取物語に読み取られる。平安初期の九世紀ころ成立したと推定されるこの物語の結末部は、おおよそ以下の通りである。

かぐや姫はみかどの求婚を断つて、天へ戻っていくが、その際ミカドに壺に入れた「不死の葉」を残していく。しかしみかどは、かぐや姫が居なくなつて

保物語と比較される。絵合とは平安時代に宮中で行われた遊びで、人々が左右二つのグループに分かれて、それぞれが推奨する作品について論評しあつて、優劣を競つたのである。

源氏物語絵合の巻では、竹取物語と宇津保物語が競われて、竹取物語の負けとなるが、その理由はかぐや姫は誰も知らない世界へいつてしまい、みかどのためには何の役にもたつていないから、というのである。でも、かぐや姫のこの敗北は物語のなかでのことにすぎなかつた。富士山浅間神社のご祭神は、相変わらずかぐや姫だつた。富士の煙は恋の思ひの象徴だつた。

人間の意識は時代の進展とともに確実に変化する。竹谷「富士山の祭神論」によると、江戸時代初期の『集雲和尚遺稿』(1614)にはコノハナサクヤヒメについて、「この神は、木花開耶姫。天津彦彦火杵命(アマツヒコヒホノニギノミコト)の妻なり。浅間神。開耶姫の御子三人あり」という記述があり、さらに富士山の祭神であつた赫夜姫(カグヤヒメ)は降格されて「富士山麓の足機山の神となる」とあるという。

また、浅間神社の本殿には次の三神像が祀られてい

るとのこと、それは

木花開耶姫命(座高38センチメートル)

天津日高日高番能瓊瓊藝命(アマツヒコヒコホノ三  
ギノミコト、座高35センチ)

大山津美命(オウヤマツミノミコト、座高35センチ)

であるが、コノハナサクヤヒメの像が父オウヤマツミノミコトや夫の三ギノミコトの像より3センチも高いのは何故なのか、明確な理由は不明であるが、想像をめぐらすならば、主神としてのヒメの地位をこうして表したのであろう。

しかしそれ以上に大きな問題は、そもそも江戸初期になつて初めて祭神がカグヤヒメからコノハナサクヤヒメに取り替えられたのは何故であろうか、ということである。その理由の一つとして竹谷氏はコノハナサクヤヒメが織姫だったことを挙げている。富士山が聳える関東地方では特に江戸時代に入って養蚕、紡織の産業が盛んになり、はた織りは女の大切な仕事であった。美しいだけが取りえで、実際の生活には何の役にもたないカ

グヤヒメよりも、美貌の織姫コノハナサクヤヒメが重視されるのは当然であった。

もう一つの大きな理由は安産の神様としてのコノハナサクヤヒメである。ヒメは男の三つ子を生んだ。昨今の人工授精ならいざ知らず、三つ子は神話時代でもまさしく空想的な希有の出来事のように考えられよう。だが、日本古代にはその実例があった。

続日本紀卷三四光仁天皇宝龜七(728)年八月の項に、「丹後国与謝郡の人采女部宅刀自女(ウネメベヤカトジメ)、一たびに三みたりのおこ男を生めり。稻と乳母の糧料を賜う」とある。一度に三人もの男子を出産した女性に稲米と乳母の給料が下賜されたのである。古代の日本ではすでに少子化対策が実行されたというわけである。

コノハナサクヤヒメは一夜にして子をはらんだことから夫から貞操を疑われた。あらぬ疑惑に立腹したヒメは戸のない産室にこもって火をはなち、その火中で三皇子を出産した。古事記はそのいきさつを次のように記述する。

次のように書かれている。

吾ヲ崇メル輩ニハ／寿福ヲ与ヘ／夜ルノ守リ／日ノ  
護リナリ／世嗣ギヲ授ケ／無実火盜／産難ヲ救  
フ

浅間神社の御利益は、

第一、寿福を得ること／第二、世嗣を得ること／  
第三、火難、盗難から守られること／第四、安産  
であること

三皇子のうち火照命が別名海幸彦で、隼人の祖。火遠理命は山幸彦で、海神の娘豊玉姫との間に設けたのが鵜葺草葺不合命(ウガヤフキアエズノミコト)で、その第四男が神武天皇である。

コノハナサクヤヒメはまさに安産の女神にふさわしい。江戸時代には「女三年子無きは去る」と言われただけでなく、跡取り息子、つまり男児を産まなければ嫁としての義務を果たしていない、と思われていた。コノハナサクヤヒメははたを織り、火中に無事三つ子を産んだ。嫁の鏡、女性の理想であった。

浅間神社の御札には「浅間託宣」の見出しのもとに

であるが、中でも大切なのは、第四の安産と第三の火災から身を守ることである。浅間神社は災難よけの神様として信仰されていた。江戸時代1707年の富士山大噴火のとき関東地方は地震、火砕流、降灰、家屋の倒壊と焼失、人畜の死傷、幕府の無策による二次災害、洪水と田畑の荒廃など、甚大な被害をこうむった。しかしこの噴火の直後から、災害よけを祈る浅間参りの人々が集団で押しかけるようになった。

以上見てきたように、日本最南端の土地に生まれたコノハナサクヤヒメは、日本全国で最高の山富士のご祭神へと出世したが、故郷の鹿児島ではどう評価されているだろうか。鹿児島といえば同地出身の天璋院篤姫が、NHKのテレビドラマによってブームを巻き起こしているが、それに比べて隼人のコノハナサクヤヒメははなはだ影がうすい。いや、神話の女性と実在の女性を比較するなど、無理な話かも知れないが、薩摩半島には木花佐久耶姫ゆかりの施設ないしは旧跡とおぼしきものがいくつか存在するので、見てみよう。

### (一) 笠沙岬・野間神社

笠沙岬に笠沙エビスという博物館を兼ねた保養施設があつて、この地の歴史、出土品の展示・説明が見られる。施設の背後の丘のうえに野間神社があり、昭和十四年に発掘・調査がなされたと言ふことで、その報告が「川辺郡史蹟その他の文書に印刷されている。神社からは水平線のかなたまで東シナ海が眺望される。この神社はもと三ギノミコトとコノハナサクヤヒメの宮殿があつた場所と見な

もある。皇室の御紋章のような大輪の菊花ではないが、このように群生して咲き誇るこの花たちも、なにか圧倒的な印象を与える。中央部の右手にツガイの雀が宙を飛びながらクチバシを合わせているのも微笑ましい。

籬菊双雀文鏡（マガキキクソウジャクブンキョウ）



され、洞穴などが確認されている。しかしまた、この場所にはその昔中国の海の女神媽祖（マーソ）を祀つてあつたともいわれている。野間（ノマ）は（マーソ）が訛つてできた名前である、という説もある。

### (二) 金峰山

笠沙岬の北にたつ金峰山にも三ギノミコトとコノハナサクヤヒメの宮殿あつたとされる地物がある。

### (三) 都万（ツマ）神社

曾於郡大崎町にある都万神社は、コノハナサクヤヒメを祭神とし、御神体は直径21センチメートルの銅鏡である。籬菊双雀文鏡（マガキキクソウジャクブンキョウ）という名称を持つこの鏡の図柄は一驚に値するであろう。多くの銅鏡の図柄は龍などの鳥獣や文字を幾何学模様を描いて抽象画的であるが、この都万神社のものはかなり変わっている。写真に見るように、いちばん手前に水が流れていて、その水流のうえに竹垣がある。竹垣の奥の全体の三分の二以上を占める鏡面には三十余輪の菊の花がちりばめられている。花と花の間には葉や茎も見え、また花と花が重なり合っている箇所

菊は古代にあつては薬草として珍重されていた。平安時代には開いた菊の花のうえに綿をおいて香りを移させて、その綿を体になでつけると薬効がある、とされていた。また菊の節句といわれる旧暦九月九日重陽の宴では、人々は菊花を賞でた。江戸時代コノハナサクヤヒメは富士山を背景にして咲いた桜の枝らしいものを手に持った図柄で描かれたが、もとは菊の花だったかも知れない。

古代に夷人（いじん）雑類として蔑まれた隼人の祖コノハナサクヤヒメは、日本一の富士山の祭神となつて、日本じゅうから尊崇されている。そして今ブームの篤姫は、血統的には隼人族ではないが、隼人の地の血をうけて、薩摩おごじよの名を日本全国に知らしめた。

篤姫の輿入れの道具のすべてには、近衛家の家紋である牡丹の花と徳川家の家紋葵がちりばめられている。篤姫は近衛忠熙（タダヒロ）養女敬子（スミコ）として江戸城に入ったからである。大奥の女たちは篤姫の膨大な嫁入り道具を見て、さぞかし胆をつぶしたことがある。搬入するのに六日もかかったのである。女たちは、「いなかの外様大名の、その分家の娘が御台所にな

るなんて！」と蔑んでいたが、牡丹の家紋に目をとめて、「後ろ楯は近衛家ですって！」と驚きあきれた。

篤姫はいささかも思いつくことなく、粘り強く、誇り高く自分のなすべきことを着々と実行した。故に、徳川最後の將軍慶喜も、篤姫逝去の報を聞くや直ちに喪に服し、追悼の歌を詠み、盛大な葬儀を営んだ。徳川宗家の後継者家達（イエサト）は特別大きい位牌を作って、命日には一家で追悼した。十五代に及ぶ徳川將軍御台所のうちで篤姫はいちばん辛抱強い生涯を送ったのである。

#### あとがき

今年には篤姫ブームである。そのせいでも、福岡の出版社權歌書房の依頼で篤姫についてのささやかな文庫本を出すことになった。そのタイトルは『二人の妃 篤姫と木花佐久耶姫』である。千里山会誌のこの号がお手元に届くころには、世に出ていると思う。

富士浅間神社の御祭神である木花佐久耶姫と徳川將軍家定の御台所篤姫は、ともに九州鹿兒島の出身である。二人は日本最南端の隼人の地で育ちながら、日本でもっとも有名な女性になった。

今回原稿を作成するにあたって、鹿兒島の多くの方々のご教示と御協力を頂いた。とりわけ笠沙エビスの堵畑耕一氏と大崎町教育委員会の内村憲和氏からは貴重な資料の提供をいただいた。ここに厚くお礼申し上げます。

